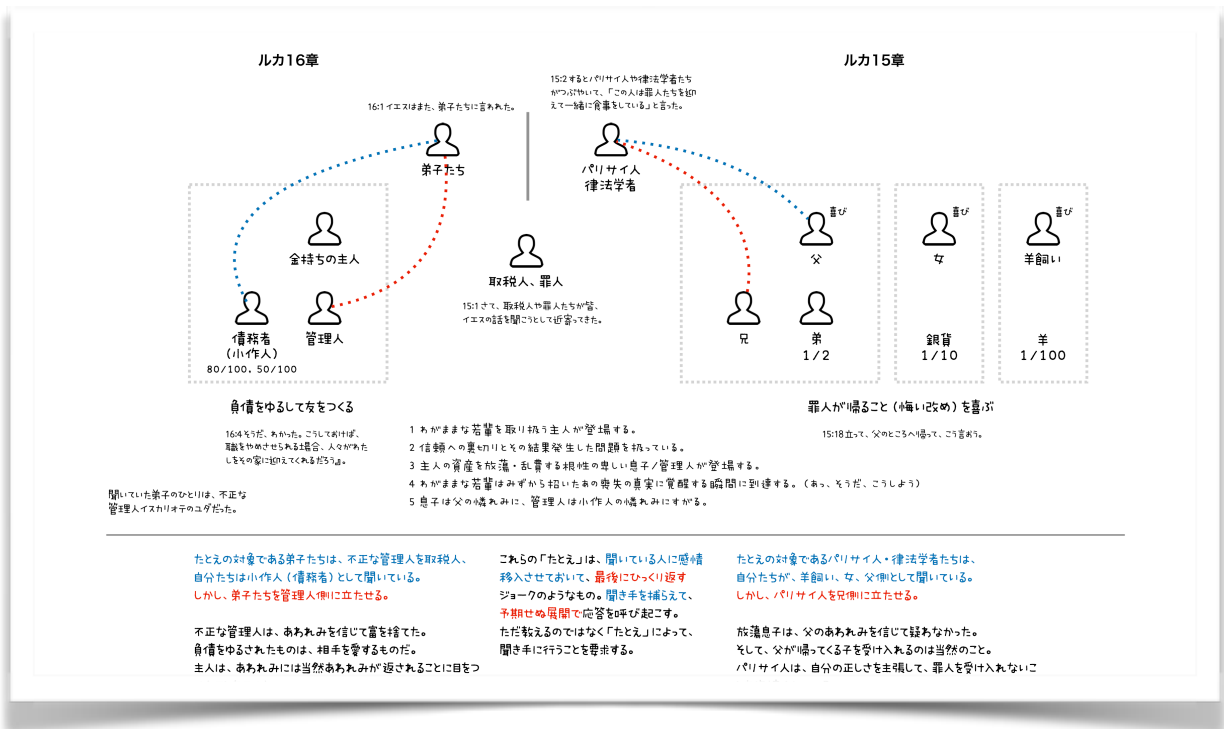




ルカ福音書 16章 不正な管理人



ルカ福音書16章の不正な管理人のたとえ話というものです。2018年6月に分析していますが、基本的には変わっていません。放蕩息子の話と言われるたとえ話と、この不正な管理人のたとえ話が、同じ場面のパリサイ人側(15章)と弟子側(16章)ということ、話が続いているということでした。

場面としては、取税人と罪人たちがイエスの話を聞こうとして集まってきました。そして、パリサイ人と律法学者が、罪人たちを受け入れて食事まで一緒にするという事で、パリサイ人と律法学者に向けて、まず15章のたとえがありました。それで今度は弟子たちのほうを向いて、弟子たちにもこういう話をされました(16章)ということです。

たとえ話のパターンというのが、いろいろあるようですが、いわゆるたとえで話しているというたとえ話。4つの土があって、この土はこうです。あの土はこうです…みたいなというように、たとえで話していますよね。

たとえ話と言われてしまうと、放蕩息子の話は、これは天の父で、ここは私たちで…みたいな、いわゆる登場人物をいろいろなものにたとえて、ストーリーを話しているかのように、それが、いちばん大切であるかのように思ってしまうのですが、この2つの15章のたとえと、16章のたとえは似ているのです。ジョークみたいな感じです。

聞いている人に、まず15章「羊飼いの羊の100匹のうち1匹を探したら、見つかったら喜びますよね」「ハイ、ハイ」と最初聞くわけ。「10枚のうち、1枚が見つかったら喜びますよね」「まあそうですね」。「2人のうち、一人が戻ってきたら喜びますよね」「はいそうですね」。「でも喜んでいないお兄さんはあなたがたですよ」と言って、聞いている人は、自分はこちら側(羊飼いの、女、父)だと思って聞いているのに、最後に

「あなたは、いやこっち側(兄)です」と言ってひっくり返して、聞き手を捉えて、予期しない展開にさせるということですね。

「えっ！」ということなのですけど、それで応答を呼び起こす。その話を聞いたら、何か行動を起こさないといけないようにさせるという話の仕方になっています。ただ、こうですよということを教えるたて話ではなくて、聞き手がしなくてはならないように、行うことを要求するというスタイルのショートストーリーです。

16章の話は、15章の話に似ています。わがままな若者がいて、それを取り扱う主人が出てきます。そして、信頼を裏切ります。問題になります。どちらも主人の財産を乱費している。それで、どうしようもないということになったときに、「ああ、そうだ。こうしよう。」と言って、この人(放蕩息子)は戻る。管理人は何かをするということでした。

放蕩息子の話と言われるたて話はわかりやすいと思いますよね。よく、天の父の憐れみをあらわしているのだというふうに、この放蕩息子の話を聞いて、みんな感動するのですが、それは、自分を弟側に置いているからですね、聞いている人が。私たちが読むときに、弟側として聞いているので、これは天の父だと思わなければならない。

もちろん天の父なのですが、これは、パリサイ人たちに向けて話している話ですので、パリサイ人はこっち(弟)側だと思って聞いていません。パリサイ人は、(弟のことを)取税人と罪人だと思って話を聞いているわけです。

「父というものはこういうものです」という…これは、天の父のみならず、悪い父であっても子どもが「食べ物をください」と言う時、石を与えませんと言っているのと同じで、「父というものはそういうものです」と。それは、天の父を表しているということにはなりませんけれど、特別なお父さんではなくて、お父さんとはこういうものですよということを言っています。

弟は、お父さんの憐れみに信頼した。絶対にお父さんのところに戻ったら、受け入れてくれるということは、疑っていないわけです。「受け入れてくれるかな、どうかなあ」という話ではないです。

こんど、こちらの「不正な管理人」の話は、弟子たちに向けて話していますので、最初弟子たちがこのストーリーを聞いているときに、「管理人」は取税人・罪人。「債務者」は小作人で、虐げられている普通の市民たちという意味で、弟子たちは、こちら側(債務者)の人たちだと思って聞いているのです。

こちら側(債務者)の人の話だと思って聞いて、「確かに、借金を棒引きしてくれる人がいれば、まあ迎え入れるよね」みたいな話で聞いているわけです。けれども、話の最後に逆転するわけです。いや、あなたがたは、こちら(債務者)側ではなくて、こちら側の人、不正な管理人側にならなくてはならないのですよというのが、似ているタイプのたて話です。

ですから、不正な管理人は何をしているのかというと、この人も憐れみを信じたのです。弟も憐れみを信じたのです。不正な管理人は、主人の憐れみを信じたのではないのです。赦した人(債権者)は、赦してくれるはずだ。憐れみを受けた人(債務者)は憐れみを返すものだ。負債を赦したものは愛されるものだということを、その憐れみの、当然憐れみを返されるというところに、この人は目をつけた。憐れみというものに信頼した。憐れまれることは確実だということで、自分の富を捨てたのです。自分のもらえるものの半分の富を捨てて、相手に与えた。それは、憐れみ返されるということだったの

で、この金持ちの主人は、良い人かどうかという話ではなくて、「まあ、うまいところに目をつけたね。そりゃあ、そうなるよね。」ということで、この金持ちの主人は(管理人を)褒めた。

いつもそうしなさいと言っているのではなくて、「そこに目をつけたのは、賢かったね」ということなのだと思うんですね。憐れみ返されるということは当然だということに目をつけたということですね。

それで、そのように弟子たちにもしなさいということで、「そこで、私はあなたがたに言います…」と言って話が続くわけです。この世の富を使って、人々に憐れみを与えて神に仕えなさい。この世の富により頼まないで、神様に仕えて従ってきなさいと。

全てを捨てて従ってきなさいと言われていましたよね。そうするならば、神様はそれに報いてくださるということを教えるためのたとえということでしたので、聞いている人たちに(15章)こちら側(羊飼、女、父)に感情移入させるわけですね。(16章も)こちら側(債務者)に感情移入させておいて、実は、反対側の(15章放蕩息子のたとえは、兄側。16章のたとえは、管理人側)立場だと知らせることによって、「何をしなさい」という教えに導いていくというのが、2つの並んでいるたとえ話です。

そのあと、また話がパリサイ人たちに戻って、ラザロの話があり、サマリア人しか戻って来なかったという話があって、この中(15章～17章)にたとえ話がいくつか入っています。

ラザロの話は、このパターンのジョークのような、最後にひっくり返すというスタイルのたとえ話というわけではないですよ。特に、15章と16章のたとえ話が似ているというのは、形も似ていますし、その訴え方も似ているということが言えると思います。そんなことがあるので、不正な管理人が褒められたということと、弟子たちに向けての話だったということを総合すると、こういうことを主人が褒めたということになるのだらうと思います。

もうひとつ、このスタイルの場合は、これを聞いている話で、応答することを求めていますから、即時性があるのです。この話を聞いて家に帰って瞑想して「天の父はこうだから、罪人の私たちはこうだから」と言って何度も思い出すようなスタイルの話ではなくて、このパリサイ人に対して攻撃しているわけです。そこから応答を引き出す。実際にその場にいるわけですから。弟子たちに対しても、同じように、この話はしていますから、そういう意味でジョークのようなものということなので、ジョークを家に帰ってから研究するようなものではなくて、そこでの反応を起こしてしまうというような即時性もこの2つのたとえ、ショートストーリーに共通していることだと言えます。

